令和８年度　中学生チャレンジテスト

学力層別類型割合グラフを活用した分析

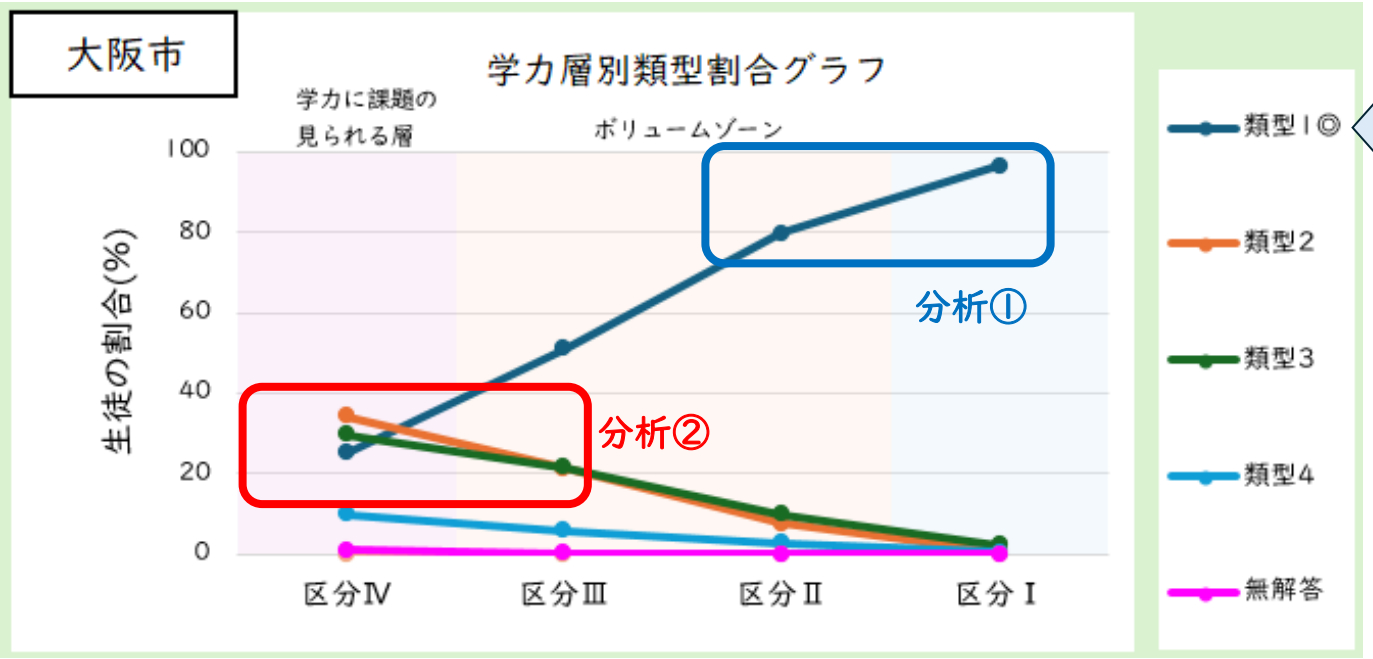
３年生

大阪市教育委員会事務局

学力層別類型割合グラフを活用した分析

「学力層別類型割合グラフ」とは、調査を実施した児童生徒の学力層を分類して（横軸）、学力層ごとに解答パターンがどれくらいの割合でいるか（縦軸）をグラフに表したものです。

（例）



※大阪府の生徒全員の得点分布の状況から、高い順に概ね25%区切りで、区分Ⅰ、区分Ⅱ、区分Ⅲ、区分Ⅳの４つに分けて分析しています。大阪市教育振興基本計画では、区分Ⅳの割合を「学力に課題の見られる児童生徒の割合」とし、区分Ⅱ・Ⅲを「ボリュームゾーン」としています。

分析①
　正答となる類型１のグラフを見ると、区分Ⅰに属する生徒の約10割、区分Ⅱに属する生徒の約8割が正答していることが分かります。

分析②
　区分Ⅳに属する生徒は正答率が３割に届かず、同じくらいの割合で類型２または類型３と解答し、誤答になっていることが分かります。

誤答となる類型２、３の内容を分析することで、区分Ⅳの生徒に対して指導すべき事柄が分かります。

各教科の得点による区分の目安（令和８年度）

令和８年度　中学生チャレンジテスト

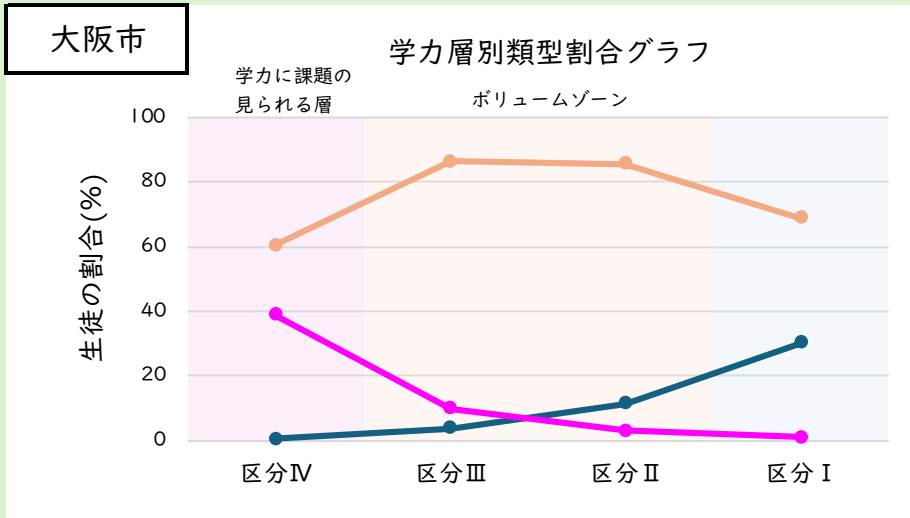
中学３年生

	国語	社会	数学	理科A	理科B	英語
区分Ⅰ	70～100点	65～100点	60～100点	65～100点	70～100点	70～100点
区分Ⅱ	60～69点	45～64点	40～59点	45～64点	50～69点	45～69点
区分Ⅲ	40～59点	30～44点	25～39点	30～44点	30～49点	25～44点
区分Ⅳ	0～39点	0～29点	0～24点	0～29点	0～29点	0～24点

中学生チャレンジテスト問題分析（３年生・国語）

									大阪府	大阪市
問題番号	三6	評価の観点	知識・技能／思考・判断・表現	問題形式	記述式	正答の類型	1	平均正答率	13.9	13.4
問題の概要	資料をもとに、発言中の空欄に入る内容を書く									
出題の趣旨	資料を活用し、根拠を明確にして話すことができる									

大阪市



区分ごとの割合と人数

	区分Ⅳ（2702人）	区分Ⅲ（4579人）	区分Ⅱ（2841人）	区分Ⅰ（4981人）
類型1◎	0.6%（17人）	3.9%（180人）	11.4%（323人）	30.3%（1508人）
類型2	-	-	-	-
類型3	-	-	-	-
類型4	-	-	-	-
類型5	-	-	-	-
類型6	-	-	-	-
類型7	-	-	-	-
類型8	-	-	-	-
上記以外	60.4%（1632人）	86.3%（3950人）	85.6%（2433人）	68.8%（3425人）
無解答	39.0%（1053人）	9.8%（449人）	3.0%（85人）	1.0%（48人）

【グラフから読み取ったこと】

正答率は区分Ⅰに属する生徒でも30.3%である。また無解答を除いた誤答の割合は、全ての区分で60%を上回っており、区分Ⅱ、Ⅲでは85%を上回っている。このことから、多くの生徒が解答をしているものの正答を導き出せなかったことが分かる。

問題文の【岡田さんの発言】に「二つの資料を合わせて考えると」とあるので、【資料１】の貸し出し冊数と【資料２】の貸し出し人数から、「一人当たりの貸し出し数」を導き出して解答する必要がある。しかしながら「三年生の図書の貸し出し冊数が少ない」のように、【資料１】のみを根拠として答えた誤答が多いと考えられる。

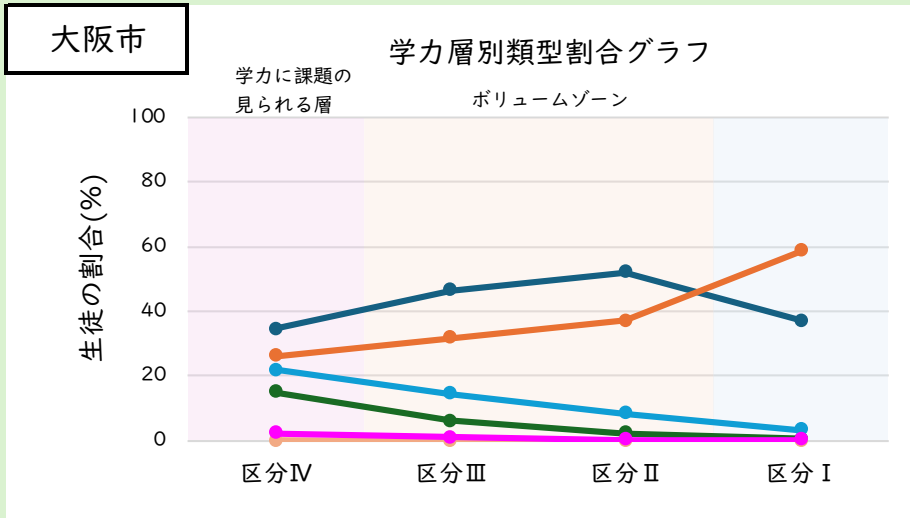
【指導改善に向けて】

問題文から読み取った内容を基に、与えられている条件を整理して文章を書き、その後他の生徒と書いた文章を読み比べるなど、自分が書いた文章が与えられている条件を満たしているか、また根拠が明確かなどを確認する学習活動が必要である。

中学生チャレンジテスト問題分析（３年生・社会）

									大阪府	大阪市
問題番号	３（１）②	評価の観点	知識・技能	問題形式	選択式	正答の類型	2	平均正答率	39.9	38.7
問題の概要	同じ地点が示された２つの世界地図から大阪のほぼ真西に当たる地点を選ぶ									
出題の趣旨	メルカトル図法と正距方位図法について理解している									

大阪市



区分ごとの割合と人数

	区分Ⅳ（3267人）	区分Ⅲ（3888人）	区分Ⅱ（4206人）	区分Ⅰ（3816人）
類型1	34.6%（1132人）	46.6%（1811人）	52.1%（2191人）	37.2%（1421人）
類型2◎	26.1%（852人）	31.7%（1234人）	37.0%（1558人）	58.6%（2237人）
類型3	15.0%（490人）	6.0%（233人）	2.2%（92人）	0.6%（21人）
類型4	21.9%（716人）	14.5%（565人）	8.3%（351人）	3.4%（131人）
類型5	-	-	-	-
類型6	-	-	-	-
類型7	-	-	-	-
類型8	-	-	-	-
上記以外	0.1%（2人）	0.0%（1人）	0.0%（0人）	0.0%（0人）
無解答	2.3%（75人）	1.1%（44人）	0.3%（14人）	0.2%（6人）

【グラフから読み取ったこと】

正答となる類型２のグラフを見ると、区分Ⅰに属する生徒でも正答率が60%に届かず、区分Ⅱ・Ⅲ・Ⅳでは40%を下回っている。

区分Ⅱ・Ⅲ・Ⅳで最も多い誤答である類型１は、メルカトル図法の世界地図で大阪から見て西に位置する都市を選択しており、地図を見るうえで方角は読み取れるものの、目的に応じて適切な地図を活用することができていないと考えられる。

また、区分Ⅳに属する生徒のうち、東側に位置する都市である類型４を選択した生徒は21.9%で、四方位を正確に読み取れない生徒もいることが分かる。

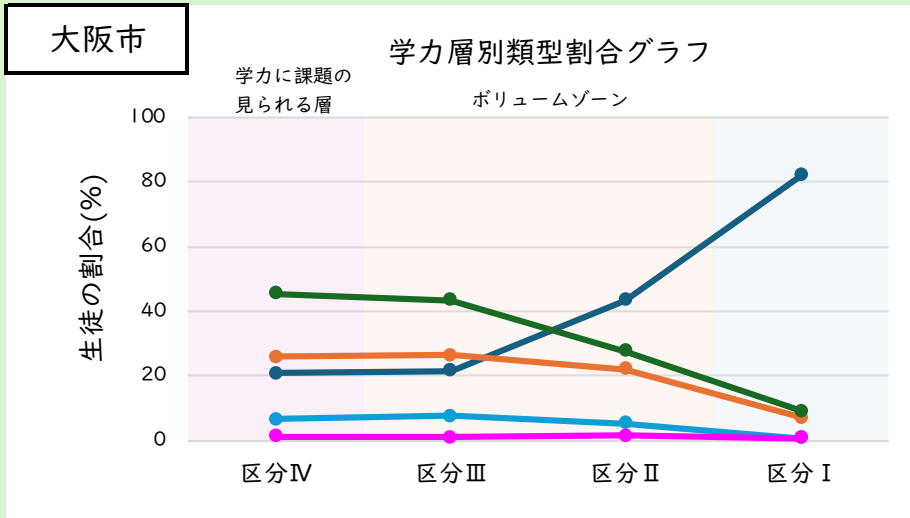
【指導改善に向けて】

個別の地図を読み取る学習活動だけでなく、さまざまな世界地図から目的に応じた地図を選択し、活用する学習活動を通して、適切な活用方法を身に付ける必要がある。

中学生チャレンジテスト問題分析（３年生・数学）

									大阪府	大阪市
問題番号	３（３）	評価の観点	知識・技能	問題形式	選択式	正答の類型	１	平均正答率	43.2	43.4
問題の概要	投影図中の立面図から円錐の高さを計算し、円錐の体積を選ぶ									
出題の趣旨	投影図から空間図形を読み取ることができる									

大阪市



区分ごとの割合と人数

	区分Ⅳ（3262人）	区分Ⅲ（3606人）	区分Ⅱ（4347人）	区分Ⅰ（3928人）
類型1◎	20.9%（682人）	21.7%（783人）	43.4%（1885人）	82.1%（3225人）
類型2	25.8%（841人）	26.4%（953人）	22.0%（957人）	7.0%（276人）
類型3	45.4%（1481人）	43.4%（1566人）	27.8%（1207人）	9.2%（363人）
類型4	6.6%（215人）	7.5%（271人）	5.3%（229人）	0.8%（33人）
類型5	-	-	-	-
類型6	-	-	-	-
類型7	-	-	-	-
類型8	-	-	-	-
上記以外	-	-	-	-
無解答	1.3%（43人）	0.9%（33人）	1.6%（69人）	0.8%（31人）

【グラフから読み取ったこと】

この問題の正答率は43.4%（大阪府43.2%）で区分Ⅰの生徒が80%を超えているのに対し、区分Ⅱ～Ⅳは20%～50%未満と半数以下になっている。グラフから、特に区分Ⅲ、Ⅳでは類型２、類型3の誤答率が高いことが分かる。類型３の数値は正答の3倍となっており、円錐と円柱の体積の求め方を混同していることが推測される。また、類型２の数値からは立面図の三角形の面積から立体の高さを求める必要があるが、その計算を誤った、または図から高さが６cmと間違った判断をしたことが考えられる。

【指導改善に向けて】

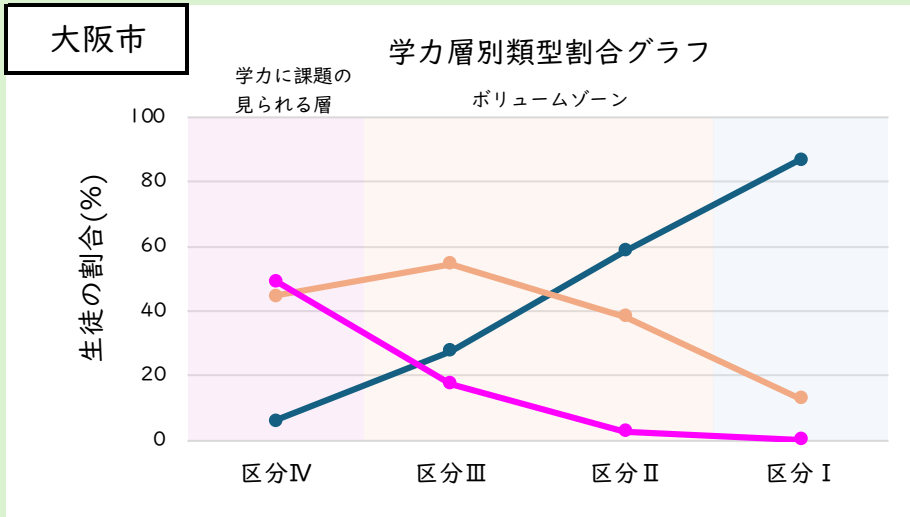
錐体と柱体の体積については、測定して確かめるなど実感を伴って理解できるようにすることが大切である。また、体積を求めるためにどの要素が分かればよいかなどを調べて解決する学習活動が必要であると考えられる。

今回は選択問題だが、底面の円の半径を6cmと間違えたり、円周率のπを書き忘れたりする場合も考えられるので注意が必要である。

中学生チャレンジテスト問題分析（３年生・理科）

									大阪府	大阪市
問題番号	４（３）①	評価の観点	知識・技能	問題形式	短答式	正答の類型	１	平均正答率	50.8	48.2
問題の概要	サンゴ礁をつくるサンゴの化石が発見されたことからわかることについてまとめた文章中の空欄に入ることばを書く									
出題の趣旨	示相化石について理解している									

大阪市



区分ごとの割合と人数

	区分Ⅳ（3038人）	区分Ⅲ（3976人）	区分Ⅱ（3774人）	区分Ⅰ（4434人）
類型1◎	6.0%（181人）	27.8%（1107人）	58.6%（2213人）	86.9%（3852人）
類型2	-	-	-	-
類型3	-	-	-	-
類型4	-	-	-	-
類型5	-	-	-	-
類型6	-	-	-	-
類型7	-	-	-	-
類型8	-	-	-	-
上記以外	44.7%（1358人）	54.7%（2174人）	38.5%（1452人）	12.9%（574人）
無解答	49.3%（1499人）	17.5%（695人）	2.9%（109人）	0.2%（8人）

【グラフから読み取ったこと】

類型1のグラフを見ると、区分Ⅰ・Ⅱの生徒は正答率が50%以上である一方、区分Ⅲ・Ⅳでは40%を下回っている。区分Ⅱ、Ⅲでは無解答以外の誤答が多いことから、正答の「示相化石」と似ている言葉である「示準化石」を混同している可能性がある。一方、区分Ⅳでは、無解答の割合が50%近くに達しており、そもそも示相化石や示準化石という語句の理解が定着していないことが考えられる。

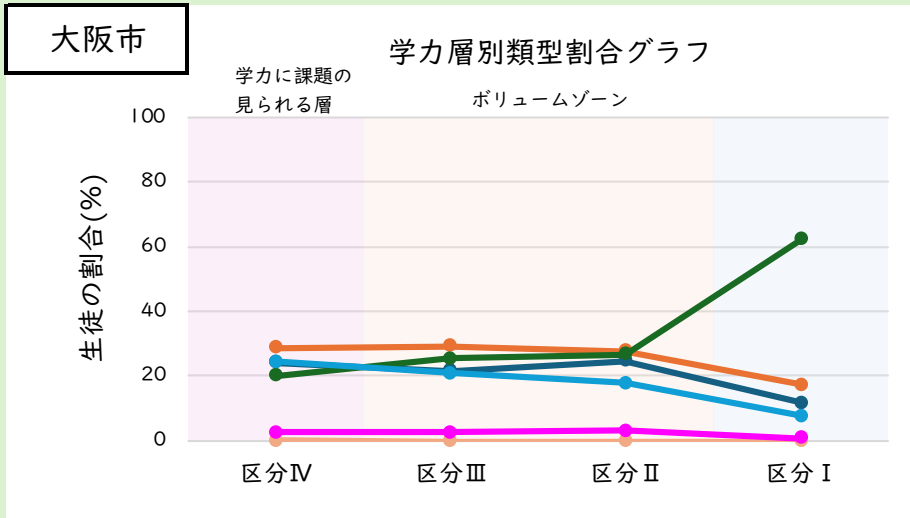
【指導改善に向けて】

「示相化石」は当時の環境を示す化石、「示準化石」は地層ができた時代を示す化石であることを、名称に含まれる漢字と意味を結び付けて確認することが重要である。そして、単に用語を暗記させるのではなく、地層から分かることについて、「示相化石」と「示準化石」を使い分けながら説明するような活動が必要だと考えられる。

中学生チャレンジテスト問題分析（３年生・英語）

									大阪府	大阪市
問題番号	９（２）	評価の観点	思考・判断・表現	問題形式	選択式	正答の類型	３	平均正答率	34.7	35.3
問題の概要	スピーチ原稿を読み、スピーチ原稿の内容から、ヨーロッパの柔道団体がスピーチ原稿中の下線部②のように提案した理由として合わないものを選ぶ									
出題の趣旨	社会的な話題についてのスピーチ原稿を読み、話の概要を捉えて、内容の要点を適切に把握することができる									

大阪市



区分ごとの割合と人数

	区分Ⅳ（2487人）	区分Ⅲ（4236人）	区分Ⅱ（4183人）	区分Ⅰ（4267人）
類型1	24.2% (602人)	21.7% (921人)	24.6% (1030人)	11.8% (505人)
類型2	28.6% (712人)	29.3% (1243人)	27.8% (1161人)	17.4% (742人)
類型3◎	20.1% (500人)	25.4% (1078人)	26.8% (1121人)	62.3% (2657人)
類型4	24.5% (609人)	20.8% (882人)	17.8% (743人)	7.7% (327人)
類型5	-	-	-	-
類型6	-	-	-	-
類型7	-	-	-	-
類型8	-	-	-	-
上記以外	0.1% (3人)	0.0% (1人)	0.0% (2人)	0.0% (0人)
無解答	2.5% (61人)	2.6% (111人)	3.0% (126人)	0.8% (36人)

【グラフから読み取ったこと】

正答である類型３を選択した生徒の割合は、区分Ⅰでは60%を超えている。一方、区分Ⅱ・Ⅲ・Ⅳではいずれも30%を下回り、正答・誤答を問わず各選択肢に約18～29%で分散している。

この結果から、区分Ⅱ・Ⅲ・Ⅳでは、提案の理由として「合わないものを選ぶ」という設問の条件に沿って情報を整理し、本文の内容と選択肢を照合することに課題があったと考えられる。そのため、本文中の根拠を十分に確認せずに解答した生徒が多かったことがうかがえる。

【指導改善に向けて】

社会的な話題についての文章を読む際には、事実と意見の区別や文と文とのつながりに着目させ、文章の構成を整理しながら読み進めることで、要点を的確に捉えられるよう指導する必要がある。